第８章　帰依して律儀を受ける　p 152－23～155―１　　小倉

黒字・本文　青字・引用／辞書等　赤字・私見

帰依の儀軌

儀軌にもまた二つ〔。

１）　共通の儀軌と、

２）　差別をもった殊勝な儀軌。そ〕のうち、

〔第一：〕共通の儀軌は、

最初、学徒〔・弟子〕は軌範師に祈願します。それから軌範師が三宝の依処の御前に供養を捧げることを先行させてから、またはそれが集まらないなら、三宝を虚空に縁じます。意により礼拝と供養を捧げてから、軌範師の後に学徒はこのように述べるべきです――〔訳註 21〕「一切の仏陀と菩薩よ、私を思ってください。軌範師よ、私を思ってください。私、名をこういう者は、この時から始まって正覚の心髄に居るまでに、両足の者たちの最上〔である〕仏陀に帰依します。離貪者たちの最上〔である〕法に帰依します。諸々の衆の最上〔である〕僧に帰依します。」といって心底から三回唱えます。

律儀（りつぎ）抑制する、防止する、などを意味する動詞。（中略）世俗の人びとのいましめ。とりわけ、在俗信者の戒律をいうこともある。

両足尊（りょうそくそん）人間の中で最も尊い人をいう。仏の尊称。両足とは、両足で歩く者、人間のこと。後代の解釈によると、仏は定と慧と、あるいは智と悲とを土台にして立っていることから両足とよぶという。

儀軌（ぎき）教誡・規則などの意。（中略）密教もこれを受けて、仏・菩薩・諸天などの造像・念誦・供養の方法・規則を儀軌といった。（後略）

広説佛教語大辞典

最初、弟子は軌範師に祈願し、軌範師に従って礼拝・供養などの儀式を行います。

両足の者たちの最上〔である〕・・・この部分は訳註の説明があります。

〔訳註 21〕『律の広釈』に「「両足の最上（両足尊）・仏陀に帰依します」というこれは、説示をなさることに正しく依る。「離貪の最上・法に帰依します」というこれは、法の最上・涅槃に正しく依る。「衆の最上・僧伽に帰依します」ということは、涅槃の都に往く伴侶に正しく依るのであるから」などという。『悟りへの階梯』

〔第二：差別をもった〕特殊な儀軌は、

１）加行と、

２）本行と、

３）後

との三つ〔。そ〕のうち、

第一〔：加行〕は、親近すべき善知識に対して、マンダラおよび花を捧げ、祈願し、それからその善知識は、学徒〔・弟子〕が大乗の種姓を持ち、器を持ったものとしてあるなら、承諾して、第一の晩に〔三〕宝の依処を配置し、供養を準備し、帰依したことの利得としなかったことの過患を説明します。

第二の晩には、本行の儀軌をすべきです。最初、面前に居られる対境に対して、三宝そのものの想いを生じさせてから、礼拝と供養を捧げます。軌範師の後にこのように述べます——〔訳註 22〕「一切の仏陀と菩薩よ、私を思ってください。軌範師よ、私を思ってください。私、名をこういう者は、この時から始まって正覚の心髄に居るまでに、両足者たちの最上〔である〕諸仏世尊に帰依します。離貪者たちの最上〔である〕寂静・涅槃の諸々の法に帰依します。諸々の衆の最上〔である〕聖者菩薩の不退転の僧伽に帰依します。」といって、三回唱えます。

それから、現観の対境を招請して、現前と同じく縁じます。礼拝と供養を捧げて、「今や〔私が〕為すことをあなたはご存じです。」という思惟により、上のように帰依を三回すべきです。

それから、真実の対境に対して、〔対象と作用と作者の三つについて空寂である〕三輪清浄の方軌により礼拝と供養を捧げて、帰依することは、一切法は本来無我であり、どんな〔自〕体としても成立していないので、仏陀と法と僧伽もまた同じく見るべきです。

それは無尽の帰依〔処〕、常である帰依〔処〕、堅固〔・不変〕の帰依〔処〕です。そのようにまた『無熱悩所問経』〔訳註 23〕に、「財物の無い心により帰依したことは何かというと、一切法は〔我が〕無いと知ってから、色としてではない、相としてではない、法としてではないと仏陀を正しく見ることが、仏陀に帰依したことです。〔仏陀の仏性は法界です。それは一切に随順する。そのように〕一切法は法界に随順していると見ることが、法に帰依したことです。〔法界・無為を修習し、声聞たちに無為を説く。〕有為と無為は二として無いと見ることが、〔財物なき心により〕僧伽に帰依したことです。」と説かれています。

第三の晩には後の儀軌です。〔三〕宝に報謝の供養を捧げるのです。

現観（げんかん）①はっきりと真理を知る。真理と一体になる。現前に真理を観ずる智慧のこと。現前に明瞭に真理を観ずること。

一切法（いっさいほう）　一切諸法・万法ともいう。あらゆるもの、一切の事物、すべての現象、物質的・精神的なすべてのもの、一切の現象的存在をいう。（後略）

有為法（ういほう）（略）因縁によって生滅する現象界の一切の事物。

無為法（むいほう）生滅変化を離れた常住絶対の状態。作用をもたぬもの。
因縁の支配を受けないニルヴァーナなど輪廻から解脱した境地や縁起の理などをいう。

理（り）（略）⑤現象の背後にあって、現象を現象たらしめているものをいう。

随順（ずいじゅん）従うこと。

法界（ほっかい）（略）法の世界。事物の根源。法の根源。大乗仏教では、この全宇宙の存在を法、すなわち真理のあらわれとみて、これを真如の同義語に使う。そしてこの法界は真理そのものとしてのブッダ、すなわち法身と同義である。（後略）

法身（ほっしん）大乗では究極・絶対の存在に名づけ、一切の存在はそのあらわれであると説く。真理を身体としているもの。真理そのもの。永遠の理法としての仏。本体としての身体。それは純粋で、差別相のないものである。それは空と同じものである。②仏の三身の一つ。仏の宇宙身。色も形もない真実そのものの身体。あらゆるものの根本。

色（しき）（略）形を有し、生成し、変化する物質現象をさすことばである。（後略）

相（そう）①すがた。かたち。ありさま。②特質。特徴。性質。③事物の表相のこと。⑪有漏のこと。

有漏（うろ）煩悩をもつもの。

四有為相（しういそう）すべての有為のダルマ（法）に必ず伴う四つの相状を示すダルマ（十四種の心不相応行の中に含まれる）。ダルマは生起するや否や、次の瞬間には消滅するけれども、細かく分けていうと、その間に、（1）生起し、（2）生起したその状態をたもち、（3）その状態が変化し、（4）消滅する、という四つの段階があることをいう。すなわち、一切の事物の生・住・異・滅の無常なすがた。また四相ともいう。

法（ほう）（略）仏の教え。普遍的意義のあることわり。（後略）

仏性（ぶっしょう）仏の性質。仏としての本性。覚者（仏）となりうる可能性。（後略）

法性（ほっしょう）諸法（諸存在・諸現象）の真実なる本性、万有の本体をいい、仏教の真理を示す語の一つで、真如・実相・法界などの異名として用いられる。ことわり。定め。（後略）

広説佛教語大辞典

P153　24 行目

それから、真実の対境に対して、〔対象と作用と作者の三つについて空寂である〕三輪清浄の方軌により礼拝と供養を捧げて、帰依することは、一切法は本来無我であり、どんな〔自〕体としても成立していないので、仏陀と法と僧伽もまた同じく見るべきです。

三輪清浄の方法により空寂であると考え礼拝・供養を捧げて帰依する、一切法は無我であり、(一切の現象は実体がないと知って）色としてではない、相としてではない、法としてではないと仏陀と法と僧伽を見るべきです。

それは無尽の帰依〔処〕、常である帰依〔処〕、堅固（・不変）の帰依〔処〕です。

とは無為性における帰依という意味なのでしょうか。(無為　因果関係を離れた常住絶対のもの。)

P153　下から５行目
一切法は〔我が〕無いと知ってから、色としてではない、相としてではない、法としてではないと仏陀を正しく見ることが、仏陀に帰依したことです。
一切法は無我であり仏陀は実体性ではない、自相ではない、教えそのものではない、と見ることが仏陀を正しく見るということでしょうか。（法界＝法身＝空）

P154　１行目
有為と無為は二として無いと見ることが、〔財物なき心により〕僧伽に帰依したことです。」とは、般若心経にある　色すなわち空、空すなわち色　と同じことをいっているように思えます。有為法（世俗諦）では一切が無自性であり、それは無為法（勝義諦）では空性である、といっているので有為と無為は別の物ではないことを指して「二として無い」と表現しているのでしょうか。そう見ることが僧伽に帰依したことである、と捉えました。
　ここで、一切法、有為法、無為法などがどういう位置にあるのかを知りたくなり「チベットの般若心経」より以下抜粋させていただきました。

「チベットの般若心経」より
仏教用語で、あらゆる存在すべてを含めて、「一切法」あるいは「諸法」という。およそ「存在する」といえるものごと（有）のすべてが、一切法にほかならない。有は、「正しい「認識（量）の対象（所縁）となるもの」と定義される。また、一切法の範囲は、仏陀の智慧によって知られるべきもの（一切智智の所知）の範囲と、広さが完全に一致する。この一切法の中に含まれなければ、それは全く存在しないもの（畢竟無）である。仏教論理学の伝統的な表現では、畢竟無の喩例として、「虚空の蓮華」とか「兎の角」などをあげている。これらは、幻覚や誤った認識によって知覚されるかもしれないが、正しい認識の対象とはなり得ない。また、「宇宙の創造神」といった概念も――仏教の立場からすれば――誤った見解の産物にほかならず、いかなる意味でも存在するとは認められないので、一切法の範囲外に位置づけられている。
　一切法は、有為法と無為法とに分けられる。「有為法」とは、成立・維持・消滅（成・住・滅）という三つの性質（三相）を有する存在で、原因と条件（因・縁）に依存して成立する。このように因と縁によって作られたことを、「所作性（しょさしょう）」という。所作性ならば、在り方として「無常」である。（中略）有為法であれば、それ自身が因や縁となることにより、他の有為法へ何らかの効果的作用（功用（くゆう））を及ぼし得る。このような存在を、「事物（じもつ）」という。つまり、有為法と所作性と無常と事物とは、同一の存在を別々な側面から見た表現であり、範囲の広さはいずれも一致する。「範囲の広さが一致する」という意味は、例えば、「有為法であれば必ず無常である」と「無常であれば、必ず有為法である」という二つの主張命題が両方とも成立することだ。前に「五蘊とは、あらゆる事物を色・受・想・行・識という五つの集まりに分けたもの」と述べたが、五蘊の全体と有為法とは、範囲の広さが一致することになる。
　「無為法」とは、一切法のうち有為法に該当しない存在であり、成・住・滅の三相から離れている。因と縁によって作られたものではないから「非所作性」であり、いつも変化することがな

いから「常」であり、それ自身が他の因や縁となって効果的作用を及ぼすこともないから「非事物」である。無為法の例としては、空性や真如という言葉によって表現される究極の真理そのもの、輪廻から解脱して因果の束縛を離れた境地である涅槃（ねはん）、そして虚空をはじめとする概念的存在などがあげられる。

一切法は有為法と無為法に分けられ、有為法は色・知・心不相応行に分けられ、知は心王と心所に分けられ、心王は識と同義で、識は五蘊に属する。五蘊と有為法は範囲の広さが一致し、それに無為法を加えて一切法となる。

> 心相応行　心不相応とは、特に心と相伴う関係にあるのではないもの。それは物でも心でもなくて、それらの間の関係とか力、また概念というような特殊なものを意味する。非心悲物の原理で行蘊に摂せられる。

無自性性・勝義諦・空性・真如・真実義・法性・法界などの用語は、すべて同義であり、無為法に属する。

「チベットの般若心経」より
ゲシェー・ソナム・ギャルツェン・ゴンタ
クンチョック・シタル
齋藤保高　　著

帰依の作業

作業は『荘厳経論』〔訳註 24〕に「危害すべてと悪趣と非方便と有身〔見〕」と劣乗より救護するから、最上の帰依〔処〕です。と説かれています。

それもまた、共通の帰依〔処〕は、危害すべてと、三悪趣と、方便でないものと、有身見と、小乗より救護するのです。

〔差別をもった〕殊勝な帰依〔処〕は、劣乗までのすべてから救護するのです。

帰依の学処

〔学ばれるべき〕学処には、
1）一般の学処の三つ、
2）差別の学処の三つ
3）応分の学処の三つの〔、合計〕九つがあるのです。

そのうち、第一〔：一般の学処〕は、常時に〔三〕宝の供養に勤めるべきですし、たとえ自分がどんな食べ物を食べるのでも〔、その〕初めのお供えによってもまた供養することと、命と為し難いことのため〔訳註 25〕にも〔三〕宝を捨てないことと、〔三〕宝の功徳を随念することを通じて、たびたび帰依することにつ

いて学ぶのです。
〔第二：〕差別の学処の三つのうち、仏陀に帰依したので、他の神に帰依しないのです。『大涅槃経』[訳註26]に「諸仏に帰依した者、彼は正しい近事〔・優婆塞〕です。けっして他の諸天に帰依を申し上げることにならないのです。」と説かれています。

法に帰依したので、有情たちに加害しないのです。『〔大涅槃〕経』[訳註27]にまた、「正法に帰依したならば、加害し損傷する心を離れています。」と説かれています。

僧伽に帰依したので、外道者に親近しないのです。『〔大涅槃〕経』[訳註28]にまた、「僧伽に帰依したので、外道者に従わないのです。」と説かれています。
〔第三：〕応分の学処の三つのうち、仏宝の依処〔である〕如来の像は、たとえ小さな粘土像でも破片以上のものに対して尊敬するし、法宝の依処〔である〕正法の経函と経函、たとえその一文字以上のものに対しても尊敬するし、僧宝の依処〔である〕教主の〔袈裟の〕装束と、たとえ〔その〕黄の継ぎ接ぎしたもの以上のものに対して尊敬するのです。

注釈文の説明があります。

〔訳註24〕危害すべてからとは、如来の加持により盲目、聾、狂乱、病気、凶作などから救護されることである。悪趣からとは、如来の放った光明により、今悪趣の者たちの苦を鎮め、悪趣に堕ちようとしている人たちをそうさせないことである。非方便からとは、外道の誤った見や行を捨てさせ、十善業道や八聖道に入れることである。有身見からとは、我と我所執を持つ者に人無我を説いて涅槃に入れることである。劣乗からとは、不定種姓の者を大乗に転向させることである。（訳註文より）

作業（さごう）①行為。はたらき。
近事（ごんじ）三宝に近づいて仕える者の意で、在家で五戒を受けた人。在家信者。男を近事男（優婆塞）、女を近事女（優婆夷）と名づける。男女の在俗信者をいう。
招請（しょうしょう）仏や菩薩を勧請し、または人びとを招致すること。
広説佛教語大辞典
経函（きょうかん）　経を入れる箱。　大辞林第４版

以下、ガルチェン・リンポチェの法話集より引用させていただきます。

ガルチェン・リンポチェ法話集２「清浄の道」P21・22 より
帰依戒

「帰依戒」を授ける前に、三宝に帰依することの意味を説きましょう。どの宗教にも、宝あるいは帰依の拠（よりどころ）があります。拠（よりどころ）が自分の外側にあると考えた場合、それを「外の三宝」と呼びます。一つ目は仏です。三世すべてに仏がおられますが、今の時代の仏は釈迦牟尼仏です。二つ目は三蔵からなる仏法です。三つ目は僧伽（そうぎゃ）（サンガ）です。声聞乗・菩薩乗・金剛乗を実践する者を指します。仏・法・僧、この三つが外の三宝、外の帰依処です。（中略）

次に理解すべきことは、「内の三宝」が心の中にあるということです。「内の三宝」はあなた自身の心です。これがあなたの本当の帰依処です。釈尊は次のようにおっしゃっています。「解脱に導く方便を示すことはできるが、解脱そのものはその者の修行による」。

「内の三宝」のところは前々回、尾関さんも引用しておられましたが、とても意味深い言葉だと思います。
「「内の三宝」はあなた自身の心です。これがあなたの本当の帰依処です」
ガルチェン・リンポチェご自身の体験でしょうか。この言葉の意味を何度も考えてみたいと思います。